

国立 国会 図書館 月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2025.6



新版、御求め御覧下さるべく候
―国立国会図書館所蔵の蔦屋重三郎出版物―

世界図書館紀行
ムハンマド・ビン・ラシド図書館（UAE）

国立 国会 図書館 月報

NO. 770
JUNE 2025

CONTENTS

1 『新漫画の描き方』

— 漫画家岡本一平と民衆の時代 —
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

5 新版、御求め御覧下さるべく候

— 国立国会図書館所蔵の蔦屋重三郎出版物 —

22 世界図書館紀行

ムハンマド・ビン・ラシド図書館 (UAE)

33 館内スコープ

デジタル化のその先は？

34 本屋にない本

『特別展 ほろよい・ひょうご』 酒と人の

文化史』

35 NDL TOPICS



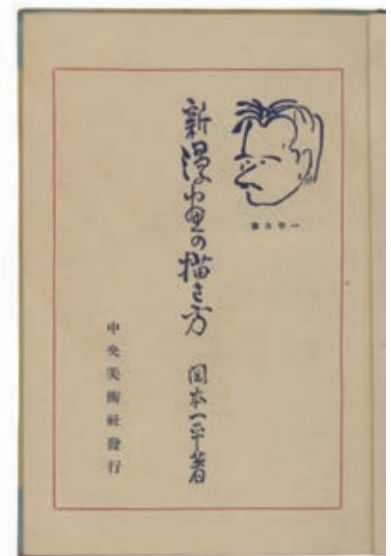
表紙：「熊奮迅」
三好学『花菖蒲図譜』2
芸艸堂 1922 32cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12395149/1/16>

『新漫画の描き方』—漫画家岡本一平と民衆の時代—

藤本 守



左の絵が漫画、右の絵が本画（美術画）。漫画に描かれた「花を観る女」は、実は花を見ているのではなくて、干した着物が花の陰になっているのを嫌がっている、という説明が付いています。



扉。右上の肖像は岡本一平自身のスケッチ。

岡本一平『新漫画の描き方』

中央美術社 1928
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1174589>

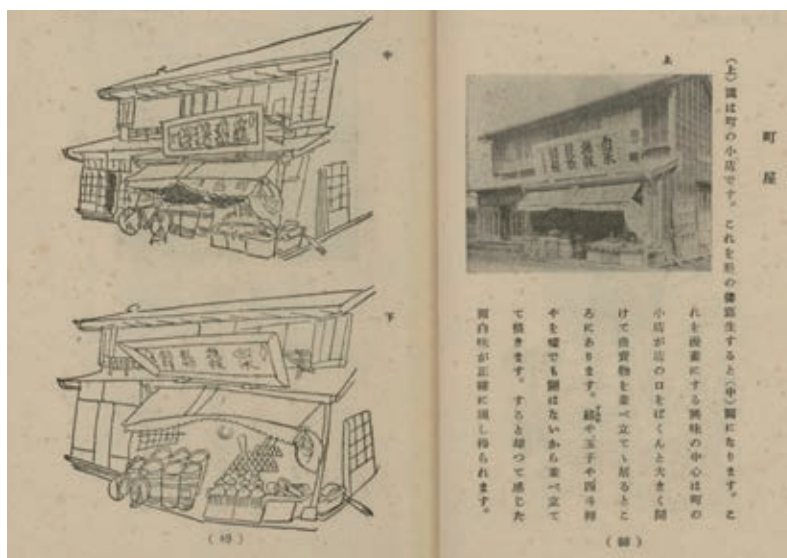
『新漫画の描き方』は、大正から昭和初期にかけて一世を風靡した流行漫画家岡本一平（1886～1948）が昭和3（1928）年に発表した作品です。

幼少期から日本画を学び、東京美術学校（現在の東京芸術大学）では洋画を学んだ岡本は、大正元（1912）年から『東京朝日新聞』の挿絵画家となり、多彩なタッチで描かれるユーモラスな絵に軽妙な文章を組み合わせた「漫画漫文」のスタイルで当時の読者を魅了しました。昭和4～5（1929～1930）年に先進社から刊行された『一平全集』全15巻は大ベストセラーとなったことで知られています。

『新漫画の描き方』は、岡本の漫画論であるとともに、岡本流の漫画の描き方を、実例を織り交ぜながらまとめたマニュアル本です。この本で岡本がまず目指したのは、完成された美術作品を指す「本画」と「漫画」を対照させながら、漫画とは何かを示すことでした。岡本は漫画を「世態人情を穿つ^{うが}画」、すなわち描く対象の本質、人間であれば心情を深く洞察して描く絵であり、色彩や陰影などで視覚的な美しさを追求する本画とは異なるのだと述べます。そして、漫画を描く際は、本画で描かれる「美なぞは未練なく」切り捨て、描き手の主観で描くべき部分は強調

写真をもとに入口の様子を写生したもの。

写生で描いた絵をデフォルメして漫画にしたもの。間口を広げてお客を待っているようにも見えます。

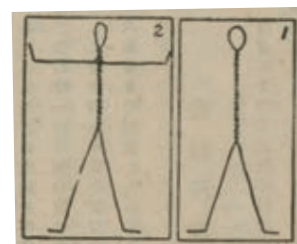


◀ 店の入口（写真）

針金の人形をひな型に



▲ 岡本は『金色夜叉』の貫一とお宮も針金人形で表現してみせます。これは熱海の海岸での貫一とお宮の別れのシーンです。



▲ 1本の細い針金を縫って体を作り、その後もう1本の針金を取り付けて腕を作れば、針金人形の出来上がり。

▲ 自分の表したい気持ちが表現できるよう、針金の人形をいろいろ折り曲げてみて、それを紙に描き写し、肉付けしたら人物が描けると指南しています（点線部分は下書きです）。楽しみに談笑する男女の様子を描いたものです。

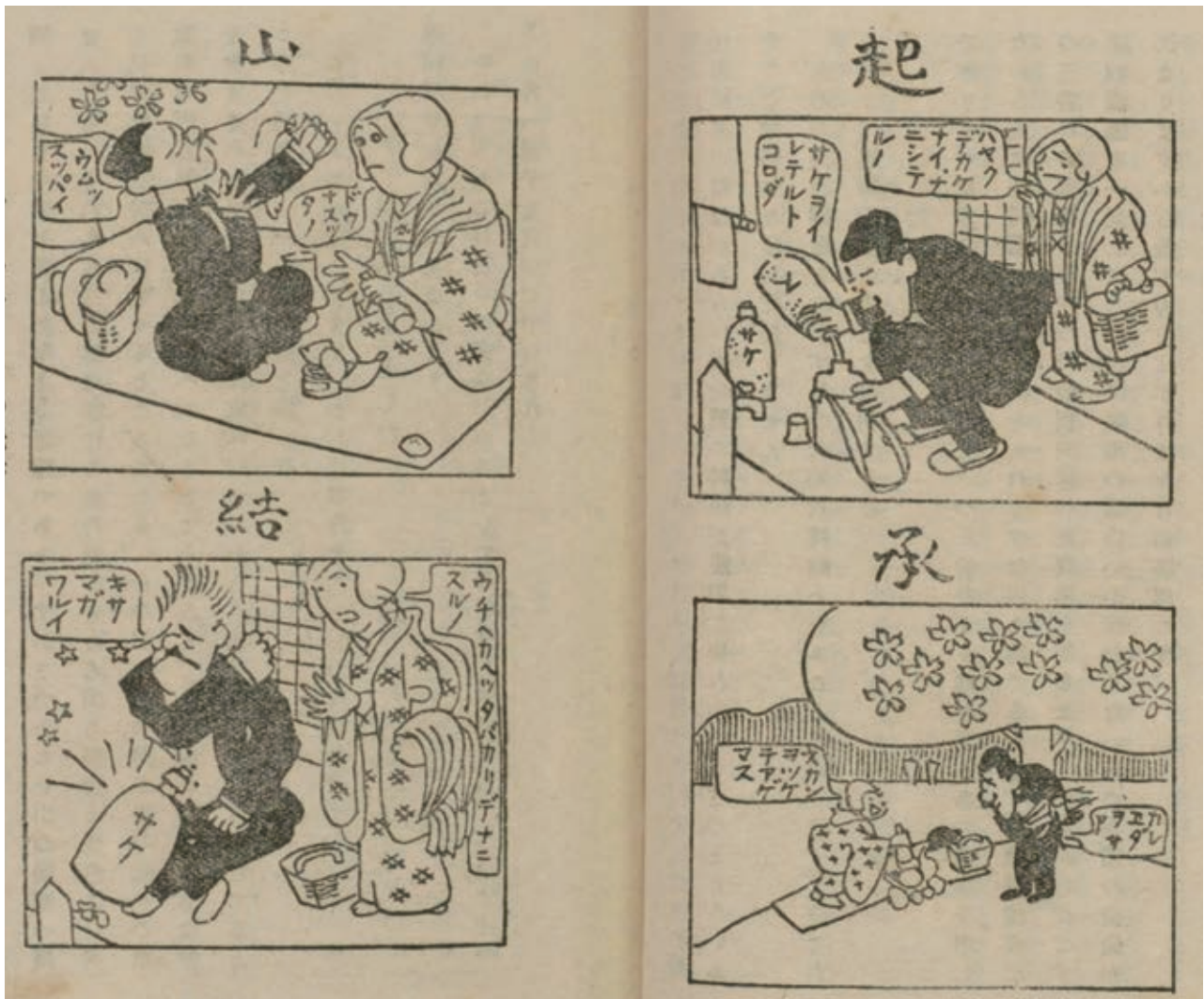
し、不要な情報は捨象して作品を精練させるのだといいます。

本画と対照させ、絵画の一ジャンルとしての漫画の価値を語ろうとする岡本ですが、漫画の描き方の実践例は、岡本の作品らしくユーモラスに、かつ読者の心を惹きつけるものになっています。ここで、本の中からいくつかその例をご紹介します（本頁・次頁の図版参照）。

町の中のある店舗。岡本はそのまま写生した絵と漫画を並べてみせます。漫画の方は入口が大きくデフォルメされ、あたかもお客を待っているような面白味が感じられます。

また、人間の描き方は針金の人形をひな型にして研究するといひ、と岡本は述べていますが、ここでは、明治から大正にかけてのベストセラーである『金色夜叉』に登場する貫一とお宮を針金人形で表現しています。

「連続漫画法」として紹介されているのは、ストーリーを描写するいわゆる4コマ漫画の形式です。ここでは、夫婦でのお花見に酒を持っていくはずが、間違えて酔を持ってきてしまい、帰宅して酒瓶に八つ当たりしている夫が描かれています。4つのコマを、起承「転」結ではなく、起承「山」結と紹介していますが、「山」の場面を面白くできるかどうかで作品の価値が決まるので、最も力を注がない



「連続漫画法」、いわゆる4コマ漫画の一例です。4つのコマの上に、「起」「承」「山」「結」と書かれています。「山」の場面では、せっかくのお花見で、お燗ではなく温めた酔を飲んでしまい、「うむっすっぱい」と身もだえる夫が描かれています。岡本によれば、コマの絵に説明文を付けず、絵の中の人物にセリフを語らせて話の筋を運ばせるのが案外苦心するところだといいます。当時は、新聞や雑誌が4コマ漫画の連載を開始し、読者からの人気を集め始めた時期でした。

といけない、と岡本は書いています。

岡本が漫画家として活躍した当時は、いわゆる大正デモクラシーの時期で、それとともに日本のジャーナリズムが発展し、出版文化が大きく花開いた時期でした。岡本は、民衆本位ともいえる社会状況の中で、民衆の「御用絵画」である漫画が時を得るのは必然であるといえます。また、帝国美術院展覧会（通称・帝展）の入場者数19万5千人と大手の新聞紙の1日の発行部数100万部とを比較して、人々の目に触れる機会がいえば圧倒的に漫画の方が多いとも語り、広く情報を伝達するメディアの役割を十分に意識していました。岡本が紹介する漫画の技法の数々は、民衆の心をつかむべく描き続けた岡本の試行錯誤を物語るものとも言えるかもしれません。

また、岡本の創作の根底には、漫画が過去や未来を描くものではなく、現代を捉え、現代を生きる人々に語るための「絵画的言葉」であるとの思いがありました。そのためには、漫画家は観察、経験を通じて、「暗誦」できるくらいに記憶して表現できるほど、深く現代を知ることが重要だと述べていて、岡本が考える理想の漫画家像も読み取ることができます。

『新漫画の描き方』が重版された際に岡本が寄せた序文によれば、20年近くにわたる漫

「平描法」
政治家の風刺画



細い線と黒い墨で図案風に描く技法「平描法」の一例。上の絵は、当時の政界のリーダー、政友本党の床次竹二郎（左）と憲政会の若槻礼次郎（右）が、もう一つの主要政党である立憲政友会に対抗する新政党を立ち上げるべく、「無条件の丸裸」になって握手しているところ。新聞で政治家の風刺画を数多く手がけた岡本らしさが出ています。

「白描式」
パパが子どもたちに作ったのはこのぼりではなく…



物の輪郭などをすべて線だけで描いて趣きを表す技法「白描式」の一例。パパがつくった、こいのぼりならぬ、「きすのぼり」、「ふく（ふぐ）のぼり」、「いわしのめざしのぼり」を手に遊ぶ3人の子もたちです。お兄ちゃんは困り顔のようにも見えます。

夏目漱石の激賞

岡本一平の漫画を激賞した人物に、かの夏目漱石がいました。漱石は、新聞に掲載された岡本の挿絵を集めて本にしたらどうかと岡本の同僚に話し、それを聞いた岡本は、手持ちの絵を持って漱石の自宅を訪れます。漱石は本の序文を書くことを引き受け、その序文の中で岡本の漫画と文章を絶賛したのでした（『探訪画趣』磯部甲陽堂、初版1914）。『新漫画の描き方』では、その漱石の似顔絵で輪郭の描き方を紹介しています。



写真をもとにした輪郭



写真

画家生活の中で「漫画の描き方」をテーマに著作をまとめたといふ心期していたといえます。そこには、漫画家として成功したことへの感謝とこの本を社会に捧げたいという思いがありました。そして「これだけに独創的にまとめた漫画の手引草は今日迄は世界にも無いと断言出来る」と、出版の意義を語っています。

この本からは、一世を風靡した流行漫画家というだけではなく、大正デモクラシーの雰囲気の中、民衆の時代に生きる人々の姿を深く見つめ、様々な手法を駆使して漫画という表現の可能性を探求しようとした岡本の姿が見て取れるように思います。

○参考文献

『一平全集』第15巻、先進社、1930

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1170514>

清水勲『マンガ誕生 大正デモクラシーからの出発』吉川弘文館、1999 <KC486-G446>

鈴木麻記「大正期における漫画の両義性と社会的布置 漫画家集団「東京漫画会」を事例として」『マス・コミュニケーション研究』88, 2016.1, pp. 117-136 <Z21-85>

宮本大人「岡本一平と大正期の漫画」（筒井清忠編『大正史講義 文化篇』筑摩書房、2021）

<GB461-M10>

※< >内は当館請求記号

*「序文と装幀集」『一平全集』第15巻、先進社、1930, pp.410-412（『新漫画の描き方の序』1928.6）<https://dl.ndl.go.jp/pid/1170514/1/212>

新版、御求め御覧下さるべく候 — 国立国会図書館所蔵の蔦屋重三郎出版物 —



今年のNHK大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」の主人公、蔦屋重三郎^{つたやじゅうざぶろう}（初代、1750-1797）は、江戸時代の版元（出版者）です。主に軟文学の分野で出版物を企画刊行し、作者や絵師を育てて出版文化の発展に寄与しました。

蔦屋重三郎（耕書堂）は四代目まで確認されていますが、初代が出版活動を行ったのは、江戸時代中期の20年あまりです。この間蔦屋は、吉原細見、富本正本、洒落本、黄表紙、咄本、絵本、狂歌本などのほか、暦・節用集などの実用書や国学書・歌学書など、多彩なジャンルの書籍を出版しました。ここではそれらの出版物のうち、当館が比較的多く所蔵する黄表紙や絵本、狂歌本などの中から少し選んで、ご紹介しましょう。

黄表紙

黄表紙とは、草双紙の一種です。草双紙とは、中本サイズ（文庫本より少し大きいくらい）で全頁に挿絵がある読み物です。初期の草双紙は、おとぎ話や浄瑠璃を題材とした子供向けの内容でしたが、安永4（1775）年の『^{きんきんせんせいえいがのゆめ}金々先生栄華夢』*1をきっかけに、洒落や機知をきかせた大人向けの草双紙の出版が始まります。これを「黄表紙」とよびます*2。

*1 恋川春町（こいかわはるまち、本名倉橋格（いたる）、1744-1789、駿河小島藩士）作。出版は鱗形屋孫兵衛。盧生という青年が道士に借りた枕の力で、わずかの間に人生五十年を過ごす夢を見たという中国の故事「邯鄲（かんたん）夢の枕」を江戸に移し、金村屋金兵衛という青年が金持ちの養子となり、栄華を尽くす夢を見たとした。夢の中で最新の吉原風俗を活写する一方、これらをうわべで真似る半可通（はんかつう）の振る舞いを描き、笑いを誘った。

*2 江戸時代には「青本」ともよばれていた。

伊達模様見立蓬萊

安永9（1780）作者不詳 <https://dl.ndl.go.jp/pid/8929638>

蔦屋が初めて出版した黄表紙のひとつです。本作は吉原を舞台に、功德のために亀を買い取って放す「はなし亀」の風習を、浦島伝説にとりあわせたものです。巻末に登場する人物の背には、富士山型に「喜」の字の印がついています。蔦屋の商標といえば富士山型に蔦の印が有名ですが、初期の蔦屋はこちらの商標を用いていました。「次の幕を開けましたところは、すなわち此通り、新版の名題を御覧に入れます」との口上があり、芝居看板を模した板には「耕書堂ときこえしは 花のお江戸の新よし原 大門口と日本堤の中にまとふや蔦かつら つたや重三が商売の栄」とあります。桜の枝には黄表紙・咄本の書名入りの短冊が賑々しく掛かっています。蔦屋による黄表紙出版のはじまりです。



『伊達模様見立蓬萊』巻末



遊女梅が枝は亀の化身である男性とともに、小亀の背を渡って龍宮に向かう。「式三馬」の朱印から式亭三馬（1776-1822、戯作者）の旧蔵本とわかる。



みるがとくいつすいのゆめ

見徳一炊夢

安永 10 (1781) 朋誠堂喜三二作, [北尾重政] 画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892464>

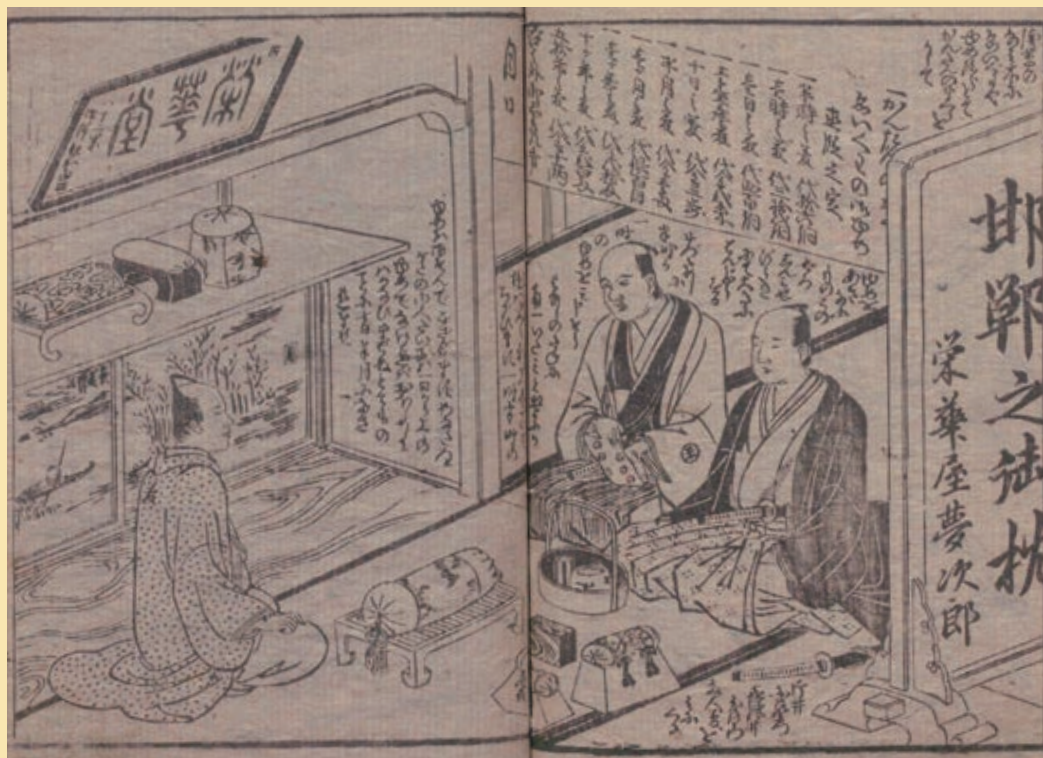
安永 10 年、黄表紙評判記『菊寿草』*¹ が刊行されます。役者評判記を模したこの本の中で、鶴屋・奥村・西村など老舗の版元を差し置いて、最高位の「立役之部 極上々吉」を与えられたのが本作です。作者の朋誠堂喜三二*² は恋川春町と並ぶ、初期黄表紙の代表的作者です。春町の『金々先生栄華夢』と同様「邯鄲夢の枕」を素材にしていますが、これを貸し出す商売を考えたのが新たな趣向です。最低料金の十六文で芝居の夢を見た者は、役者の顔も台詞もわからず後悔します。芦の屋清太郎は千両出して五十年の遊興と没落の夢を見ますが、遊興の舞台は京・大坂・長崎・唐（中国）にまで及び、遊里以外の道楽も描かれます。目覚めると注文したそばが届くところで、そもそも枕の貸し出しも夢だったという筋です。先行作を焼き直して違いを楽しむやり方は、黄表紙においてはむしろ積極的に行われていました。

* 1 四方山人著。四方山人は大田南畝（おおたなんぼ、1749-1823、本名大田章（ふかし）、四方赤良・蜀山人とも。御家人）の筆名。出版は本屋清吉。

* 2 1735-1813、本名平沢常富、秋田藩士。



能「邯鄲」の場面のように団扇を構え、三つ布団の上で準備万端の清太郎。『菊寿草』に「見得の絵よし」とある場面。



邯鄲の枕を貸す、栄華屋夢次郎の店。種々の枕が揃い、賃料一覧が掲げてある。

えどのはるいちやせんりょう
江戸春一夜千両

天明6 (1786) 山東京伝作^{さんとうきょうでん}, 北尾政演画^{きたおまさのぶ} <https://dl.ndl.go.jp/pid/2532477>

戯作者として一世を風靡した、山東京伝^{*1}の作品です。長右衛門という金持ちが家内の者に大金を与え、一夜のうちに遣うことができたものには褒美をやると言い出します。皆が苦勞するところ、息子だけは金を母親に与えることで遣い切ります。各々の金の遣いようが面白く、当時の読者の共感と笑いを誘ったことでしょう。本書には一部の絵柄が異なる改刻本がありますが^{*2}、掲出本は初版で、絵題簽もすべて揃っています。

*1 1761-1816, 本名岩瀬醒(さむる), 浮世絵師・戯作者。絵師としての名は北尾政演。

*2 棚橋正博『黄表紙総覧』前編, 青裳堂書店, 1986



丁稚は持ちつけぬ金を持ち震えていたが、水を飲んで落ち着き、屋台で買い食いをして回る。



隠居は寺に寄進を申し入れるが欲得ずくを見透かされ、和尚に叱られる。



義太夫狂言「ひらかな盛衰記」の趣向を逆手に取り、無間の鐘(撞くと現世では裕福になり、来世は地獄に落ちる)に見立てた手水鉢を逆さに撞いて金を消そうとする母親と、芝居の筋書どおり二階から金を降らせる息子。



上、中、下巻の絵題箋。書名・版元商標・各冊の内容を表す絵が示されている。枠のデザイン（本書の場合は蕨かざら）は各版元において年ごとにおおむね統一されており、刊記を持たない黄表紙の版元や出版年を推定する手掛かりとなる。



初版本（左）と改刻本（右 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892531>）。芸者の衣装が黒から縞に変更されている。

ぶんぶにどうまんごくどおし
文武二道万石通

天明8(1788)朋誠堂喜三二作、喜多川行磨画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892612>

式亭三馬¹が後年「名作青本略記」²のひとつに挙げる作品で、老中田沼意次の失脚と、次の老中松平定信による文武奨励策を素材としています。武士たちを、米と粃等を分別する農具「千石通」を通すように振り分け、ぬらくら武士には文武いずれかの教育を施そうという筋で、舞台は鎌倉時代に設定していますが、少年姿の源頼朝は若き將軍家斉、重臣畠山重忠は松平定信など、登場人物が当世の人物を示すことは明かでした。作中人物のせりふによれば、本作には実在の人物に関する話題が、一般の読者には理解しづらいほど細かく描かれているようです。本作には再版とその一部改刻版もありますが、当館本は初版であり、モデルとなる人物や事柄を示すサインが最もあからさまに描かれています³。趣向に千石通を用いたことは、松平定信が天明飢饉の折、白河藩の飢餓対策に手腕を発揮したこと、また田沼失脚の契機となった、米価高騰による打ちこわしからの発想とされます。本書は必ずしも当時の為政者を批判するものではありませんでしたが、大名の家臣でありながら政情を戯作としたことを咎められ、喜三二は以後、黄表紙の作を止めています。

*1 1776-1822, 戯作者。滑稽本『浮世風呂』等の作者。

*2 『稗史億説年代記』(くさぞうしこじつけねんだいき, 享和2(1802)年, 西宮新六) 卷末に掲出。

*3 棚橋正博『黄表紙総覧』前編, 青裳堂書店, 1986に3つの版の比較表あり(pp.734-736)。



「妖怪窟」「文雅洞」「長生不老門」のいずれを選ぶかで、大小名を文・武・ぬらくらに振り分ける。



初版(左)では重忠の袴に梅鉢模様(久松松平家の家紋)が散らしてあるが、改刻版(右)では桐模様である。

(改刻版)『文武二道萬石通』(国文学研究資料館所蔵)

出典: 国書データベース <https://doi.org/10.20730/200025384>



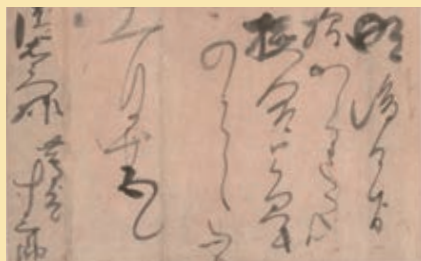
たつのみやくかいのたまてばこ
竜宮苦界玉手箱

寛政 9 (1797) 曲亭馬琴作, [北尾重政] 画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892834>

最後に、現代でも知名度の高い3名が関わる作品をご紹介します。これは『南総里見八大伝』*1の作者、曲亭馬琴*2の黄表紙で、龍宮の廓を舞台に、浦島伝説と猿の生き胆の話をつないで交ぜにしたものです。武家の出ながら戯作を志し、山東京伝のもとに出入りしていた馬琴は、寛政4年から約1年間、蔦屋に身を寄せており、独立後も多くの作を蔦屋から出版しています。読本の初作『高尾船字文』(寛政8年)も蔦屋の刊行です。

*1 文化11(1814)年～天保13(1842)年、山青堂ほか

*2 1767-1848, 本名滝沢興邦(おきくに)のち解(とく), 通称清右衛門とも。



『曲亭来簡集』雪之巻(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2585162>)には、馬琴に版下の校合を促す蔦屋重三郎からの書簡がある。『国立国会図書館所蔵貴重書解題』第12巻(国立国会図書館, 1982)に翻刻あり。



画像は最終丁。この作品も式亭三馬旧蔵で、中巻と下巻の冒頭に「式亭」の印がある。

ひんぷくりょうどうちゅうのき
貧福両道中之記

寛政 5 (1793) 山東京伝作, 勝川春朗 画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892796>

本作の絵師「勝川春朗」は、のちの葛飾北斎*です。本作は裕福な家・貧しい家に生まれた二人が心がけから貧富逆転するという筋で、「爪に火を点す」「借金 of 淵」などの慣用句を文字通り描くことで笑いを誘います。北斎は「時太郎可侯」の名で、蔦屋(二代目)から自作の黄表紙も出しています。

* 1760-1849, 浮世絵師。



ばけものこづかいちょう
化物小遣帳

寛政 8 (1796) 十返舎一九作・画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892559>

『東海道中膝栗毛』*1の作者、十返舎一九*2の作品です。器物を擬人化した作品で、初期の草双紙に回帰したような愛らしいキャラクターによる、親しみやすい物語となっています。一九もまた蔦屋の店に寄宿していた時期があります。

*1 『続膝栗毛』を含め享和2(1802)～文政5(1822)年、村田屋治郎兵衛ほか。

*2 1765-1831, 本名重田貞一, 戯作者。日本最初の職業作家といわれる。



絵本

ここでは、主に絵の鑑賞を目的として出版された本を取り上げます。江戸時代前期、浮世絵の祖ともいわれる菱川師宣^{ひしかわもろのぶ}（?～1694）による墨刷の絵本が流行しました。明和年間（1764～1772）に多色刷の技法が発達し「錦絵」が誕生すると、華やかな彩色刷は絵本にも及びます。絵本のテーマは様々で、美人・花鳥のほか、武者・職人・名所・行事など多岐にわたり、墨刷・色刷を問わず、江戸時代を通して、たくさんの絵本が出版されました。

しんびじんあわせじひつかがみ

新美人合自筆鏡

天明4（1784）北尾政演画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1288343>

新吉原の四ツ目屋・松金屋・丁子屋・扇屋・大文字屋・角玉屋・松葉屋の遊女を描く美人画絵本です。跋文で引き合いに出される『青楼美人合姿鏡』^{*1}では遊女の絵姿に四季の発句が添えられていますが、本書では遊女の自筆とされる和歌や漢詩が添えてあります。当初大判2枚続の錦絵として企画されたものを画帖仕立てにしたものですが、実際に錦絵として出版されたことがあるのは松葉屋・大文字屋の2図のみかといわれており^{*2}、この2図にのみ「青楼名君自筆集」というシリーズ題と、蔦屋の商標が刷り込まれています。フリーア美術館所蔵本^{*3}などには商標の上部に「大門口」の文字がありますが、当館本にはなく、蔦屋が日本橋通油町に移転した天明3年より後に刷られたものとわかります。

*1 北尾重政・勝川春章画、安永5（1776）年、蔦屋重三郎

*2 『山東京傳全集』第20巻、ベリかん社、2020

*3 国書データベース, <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100446941/7>



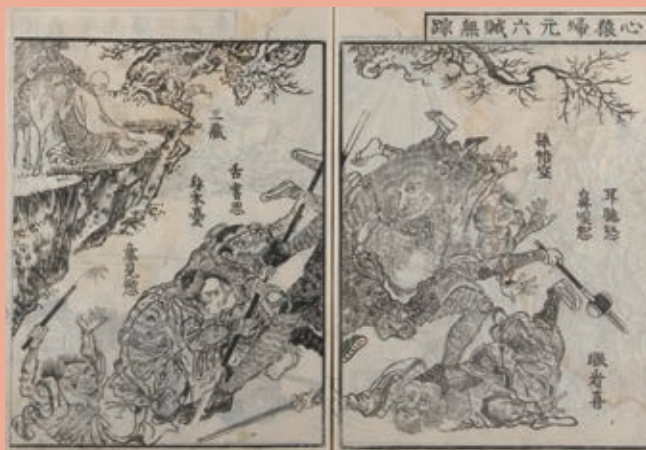
松金屋の図。中央下の禿が持っている青本には、裏表紙に「此ぬしはなその」と書かれている。三味線を弾く遊女が見ているのは長唄正本で、天明2年作曲の河東節『丹前里神楽』。床の上の本は題簽から、天明3年刊の咄本『柳巷訛言（さとなまり）』だろうか。



通俗画図勢勇談

天明4 (1784) 志水燕十作, 鳥山石燕画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13704438>

鳥山石燕 (1712-1788) は『画図百鬼夜行』^{*1}などの妖怪絵で名をはせた画家で、きたがわうたまる喜多川歌麿^{*2}の師匠にあたります。本作は石燕が『西遊記』前半の各場面の絵を描き、弟子である志水燕十が文を添えたもので、庶民向けの『西遊記』紹介としては口木山人訳『通俗西遊記』^{*3}に続く早い時期のもので、本書における石燕の絵は、後続の読本『絵本西遊全伝』^{*4}の挿絵や、合巻『濡燕子宿傘』^{*5}の口絵に影響を与えているとの指摘があります^{*6}。



孫悟空の活躍を描く場面。天明4年鳥屋刊『老来子』の巻末にある本書広告には、「猿の怪談をあらはす絵本なり」とある。

- *1 安永5 (1776) 年, 出雲寺和泉掾・遠州屋弥七
- *2 1753-1806, 浮世絵師。鳥屋重三郎に画才を見出され、鳥屋刊行の黄表紙・狂歌集・絵本に挿絵を描き、また多くの錦絵美人画を作成した。
- *3 初編宝暦8 (1758) 年, 丸屋市兵衛
- *4 口木山人訳, 大原東野ほか画, 文化3 (1806) ~天保6 (1835) 年
- *5 山東京伝作, 歌川豊国画。文化11 (1814) 年, 鶴屋金助
- *6 鈴木重三「合巻物の題材転機と種彦」『国語と国文学』38(4) (445), 1961.4; 同「絵本と挿絵本—その浮世絵一枚絵との交渉—」『Museum』403, 東京国立博物館, 1984.10

絵本武者鞋

天明7 (1787) 北尾重政画
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533215>

絵師北尾重政 (1739-1820) は書肆に生まれ、独学で絵を学んだといわれます。鳥屋の初の出版物『一目千本』^{*1}を皮切りに、自身の代表作である色刷絵本『青楼美人合姿鏡』、その他絵本や黄表紙挿画など、生涯を通して鳥屋の多くの出版物に関わりました。飯島虚心著『浮世絵師歌川列伝』^{*2}には、歌川国芳^{*3}が幼少の折、本書等を参考にして人物を描いていたとの記述があります。



- *1 安永3 (1774) 年
- *2 明治20年代に成立し写本として伝わったものを、1941, 敵傍書房より出版。
- *3 1797-1861, 浮世絵師

見立 絵本

ここでは絵本的一种である、見立絵本を紹介します。見立とは、例えば水に浮かぶ花卉の集まりを「花筏」と呼ぶように、あるものと、一見かけ離れた別のものとの間に類似点を見出すことです。宝暦5（1755）年、和泉屋平四郎ほか出版の『見立みだて百化鳥ひゃくかちょう』は「羽箒」「塵取り」をもとに「羽ほう“木”」「ちり“鳥”」の姿を描くなど、事物の名において音による見立を行い、見立絵本の嚆矢とされます。これ以降、江戸中期から後期にかけて、様々な趣向の見立絵本が出版されました。

こもんしんぼう 小紋新法

天明6（1786）山東京伝作・画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122017>

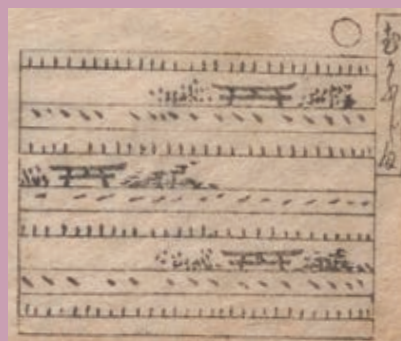
着物の柄として流行した「小紋」の見本帳を模した見立絵本です。書名は漢文の文例集として著名であった『古文真宝』^{*1}をもじったものです。当時流行の事物に関する知識がないと理解しづらい内容が多いものの^{*2}、現代人にもわかりやすいものもあります。例えば「むかふじま」という模様は、浅草から隅田川越しに見た向島の景色を、縞にこじつけています。遊び心にあふれた模様集です。

*1 漢～宋時代の詩文を集めた書。宋時代末期の成立とされる。

*2 延広真治「小紋裁 / 後編 小紋新法—影印と注釈—」1～9『江戸文学』1(2)～2(4), 5, 7, 9～12, 1990.2～1994.7 に詳細な解説あり。



左上の「本田からくさ」は、通人の間で流行していた「本田髭」の形を唐草模様にしたもの。「此きれの模様十八とおあり」というのは、本田髭の形が十八通りあることをさす。



「むかふじま」の図



「いか鳶」はイカの口を鳶の群れに、「鴨のはぎ」は水辺を歩く鴨の足を竜田川の紅葉に見立てる。



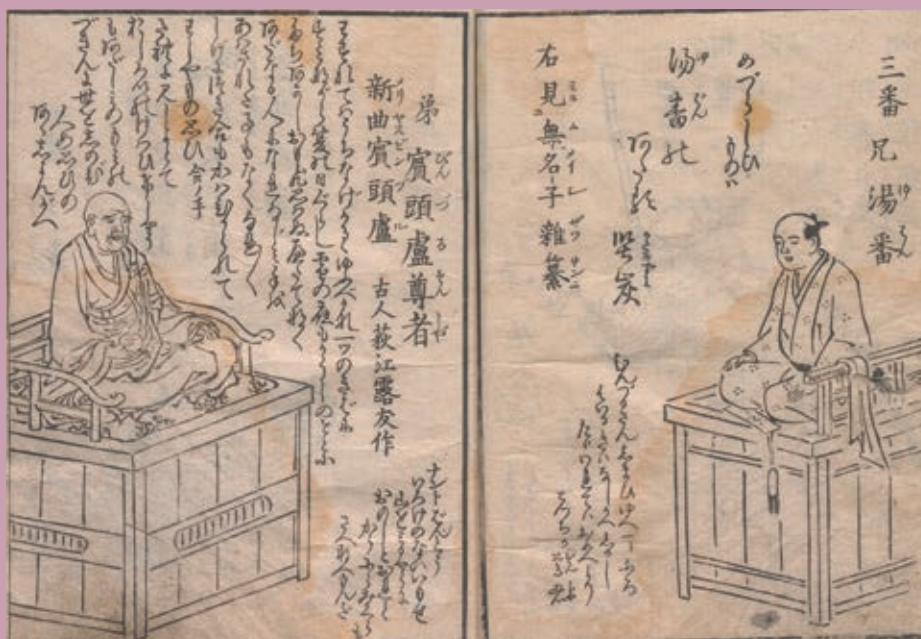
えきょうだい 絵兄弟

寛政6（1794）山東京伝作・画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122015>

形が似ているもの同士を並べ、その落差を楽しむ見立絵本で、題名は宝井其角^{たからいきかく}『句兄弟』^{*1}によります。本書は後世まで人気が高く、同様の趣向が錦絵などにも取り入れられました。後年、これをじかに踏襲した『滑稽絵姿合』^{こっけいえすがたあわせ}^{*2}という本が蔦屋（四代目）から出版されましたが、その序文には「故人京伝翁の画兄弟は寛政六年の新版にて、耕書堂の大当りも五十年余のいにしへながら、世の人今にもてはやす」とあります。

*1 元禄7（1694）年、井筒屋庄兵衛刊。宝井其角（1661-1707）は俳諧師。

*2 柳亭種員作・一勇斎国芳画、天保15（1844）年



湯番と賓頭盧尊者。「びんづるさん、仕舞い湯へー風呂入る気はなしかえ。しかしただ入れてはおめえよりこっちが尊者（そんじゃ）」



鉄拐仙人と奴紙鳶。鉄拐仙人は、自らの魂を吹き出すことができたと言われる。武家の使用人である奴が、その姿を写して作られた「奴凧」を揚げる様子を、鉄拐仙人に見立てた。

狂歌本・ 狂歌絵本

狂歌とは短歌の形式で滑稽諧謔を詠む、戯れの文芸です。江戸における狂歌の流行は明和の頃、歌人・内山賀邸門下の唐衣橘洲が同門の四方赤良（大田南畝）らを誘い、狂歌の会を催したことに始まります。参加者は武家・町人など身分の別なく徐々に増え、やがて江戸の各所で、さかんに狂歌会が開かれるようになります。こうして隆盛を極めた狂歌を、天明狂歌とよびます。この流行を背景に、もともとその場限りの読み捨てであった狂歌は本として出版されるようになり、作者・愛好者の出資や購入を見込んだ豪華な彩色刷の狂歌絵本も現れました。

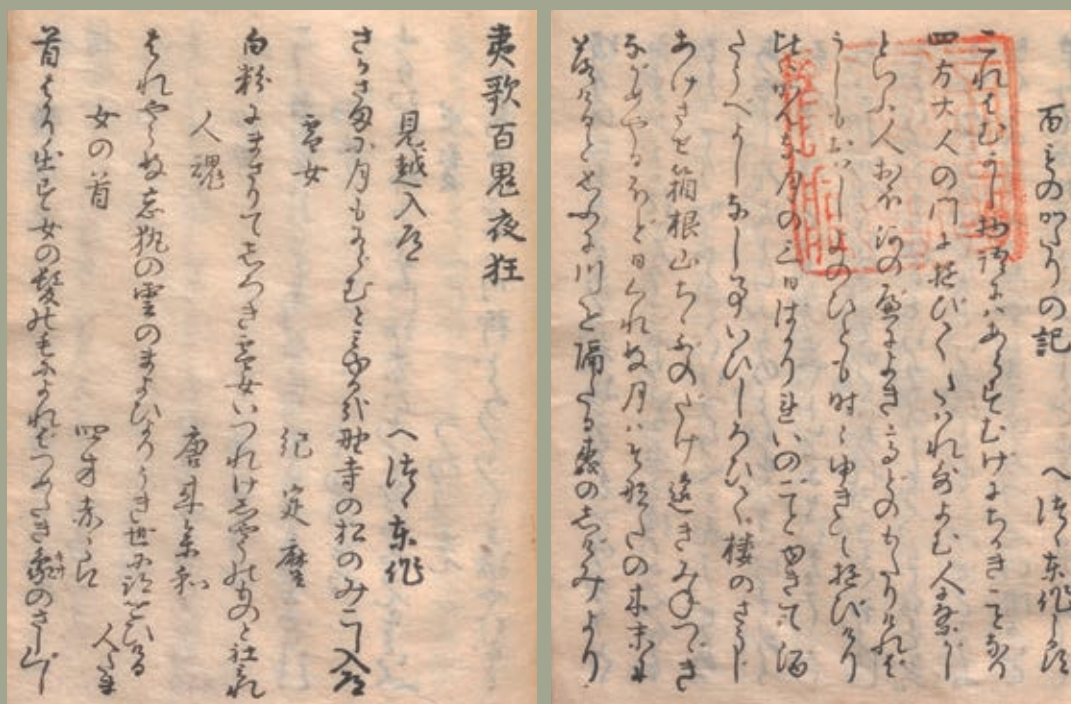
きょうかひやつきやきょう 狂歌百鬼夜狂

天明5（1785）初版、文政3（1820）再版 へつとうさく 平秩東作編 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122022>

とある晩秋風雨の夜、狂歌師15人が参加する百物語の会が開かれました。発起人は狂名^{*1} 蔦唐丸こと、蔦屋重三郎。化物や妖怪を題材に、百首の狂歌を詠む趣向です。本書内には狂歌のほか、平秩東作による「百ものがたりの記」という短文が収められており、会の一部始終を読むことができます^{*2}。猫の鈴に怯える一幕あり、突如現れた芋を巡るやり取りあり、恐ろしくもおかしい一夜が明けて、皆で湯漬けを食べる様子も微笑ましく、気の置けない仲間と集う楽しさが感じられます。掲出本は初版ではなく、蔦屋重三郎（二代目）による文政3（1820）年の再版で、文化3（1806）年の火災によって半ば失われた板木を補刻したものです。再版に際し、当時の参加者のうち、なお存命の大田南畝など4名による一筆を巻頭巻末に追加しています。

*1 狂歌師としての名前。

*2 江戸狂歌研究会『化物で楽しむ江戸狂歌～『狂歌百鬼夜狂』をよむ～』笠間書院、2014に翻刻と現代語訳あり。



（右）平秩東作「百ものがたりの記」冒頭、（左）百物語の会で詠まれた狂歌の冒頭。巻頭の1首のお題は見越入道。「さかさまに 月もにらむとみゆる哉 野寺の松のみこし入道」人が見上げれば見上げるほど背が伸びていくという怪異の姿を、松の高木に重ねる。

ねんしおれいちょう
年始御礼帳

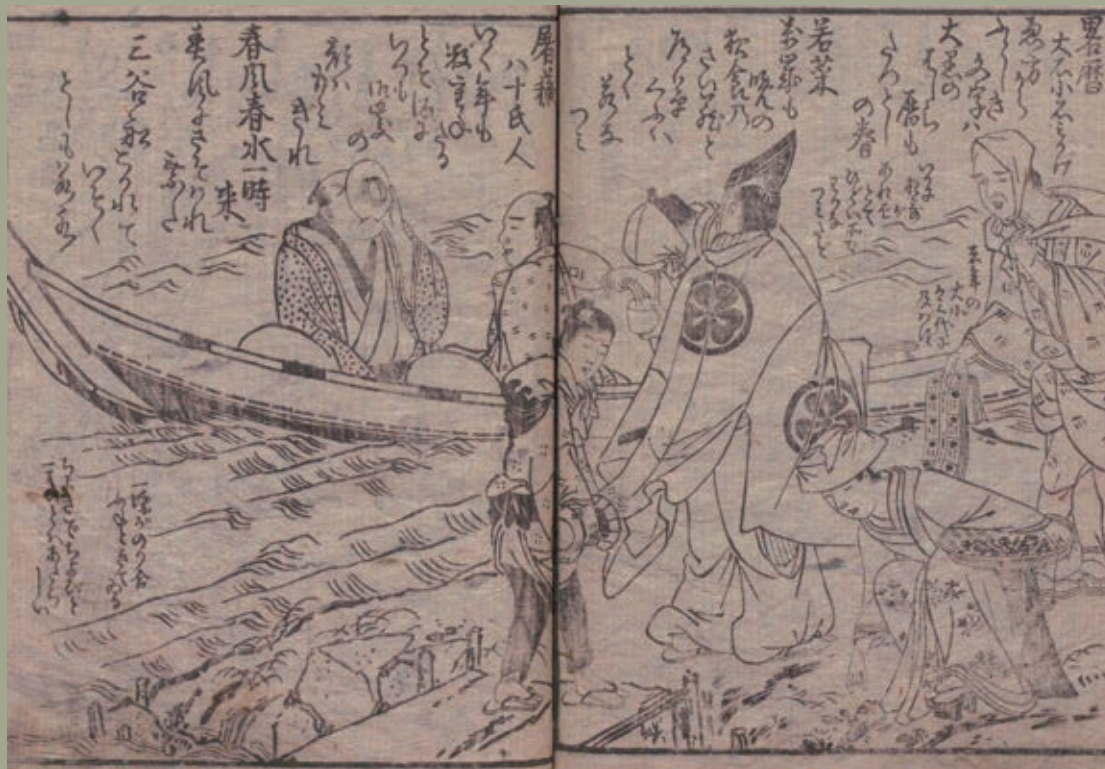
天明 4（1784）歌麿門人千代女画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892497>

黄表紙のように見えますが、実は四方側^{*1}の歳旦狂歌集^{*2}です。絵師は歌麿門人千代女とありますが、実は歌麿自身であると言われてしています^{*3}。用紙や版型、造本まですっかり黄表紙に似せているところが本書の工夫です。当館本では失われていますが、本来は表紙に四方赤良の印である「扇に巴」をあしらった、黄表紙と同じ形式の絵題簽がついています。書中には「羽子板」「屠蘇」など年頭にまつわる題の狂歌が並び、この年に予定される月並狂歌会の兼題一覧も示されます。萬唐丸も初化粧のお齒黒に寄せて「何事もめでたきふしの年玉にかねをつけたる千金の春」^{*4}の歌を寄せています。



兼題を書いた屏風

- * 1 四方赤良傘下の狂歌師集団。この年、四方側の黄表紙仕立歳旦狂歌集として、『大木の生限』『太の根』『年始御礼帳』『早来恵方道』『金平子供遊』が同時に出版された。
- * 2 新年を祝う狂歌集。多くは配り物。
- * 3 棚橋正博『黄表紙総覧』中編、青堂堂書店、1989「年始御礼帳」の項ほか。
- * 4 「ふし」はお齒黒の原料、「かね」はお齒黒のこと。



上部中央の「若菜」と題する狂歌「万歳も晩の夜食のさい蔵と道草くふはとく若なつみ」のとおりに、万歳の太夫・才蔵の足元で若菜を摘む女性。「いかに狂歌があればとて、ひどいところでわかなつみだぞ」との台詞がある。

当時活躍中の狂歌師 50 名の肖像集です。歌仙絵^{*1}の様式に倣い、画面の上に各々の狂歌を、下にその肖像を配置しています。巻頭に狂名「尻焼猿人」とある人物は、大名家の血を引く江戸琳派の絵師、酒井抱一です。四方赤良の肖像は、絵入りの扇を頭にかざすことで、冠を被っているかのように見せています。趣向を凝らした本作は、絵師北尾政演の代表作のひとつに数えられ、また絵入狂歌本の嚆矢ともいわれています。本書は初版の刊行後間もなく、部分的な改刻が行われています。改刻においては「竹杖為軽」の名が改名後の「万象亭」に変更されているほか、人物の差し替えもあることが指摘されています^{*2}が、当館本は差し替え前の初版にあたります。

*1 三十六歌仙など和歌の名手の肖像に、各人の歌を添えたもの。

*2 『山東京傳全集』第 20 巻, ペリカン社, 2020 ほか



酒上不埒（さけのうえのふらち、恋川春町の狂名）は歌仙絵の業平よろしく、矢場で用いる玩具の弓矢を携える。



【参考】勝川春章画『三十六歌仙』天明9 (1789) 年, 山崎金兵衛ほかより在原業平
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12865557/1/14>



しおひ 潮干のつと

寛政1 (1789) ^{あけらかんこう}朱楽菅江編、喜多川歌麿画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1288344>

書名の「つと」とは「土産」という意味です。元禄（1688～1704）頃より、古歌36首にちなむ貝を「歌仙貝」とすることが行われていましたが、本書ではこの「歌仙貝」36種に1首ずつの狂歌を合わせています。参考として『貝盡浦之錦』^{かいづくしうらのにしき}を用いていることが指摘されており^{*1}、本文の前に潮干狩の図を、本文の後に貝合わせの図を入れる構成も共通します。『貝盡浦之錦』は考証学的な雰囲気を持ちますが、本書は抒情的な絵本に徹しており、画帖装の造りのうちに空刷り、雲母刷りなどの技法を用いて、貝の姿を活写しています。蔦屋出版の『画本虫撰』^{えほんむしえらみ}（天明7（1787）年）、『百千鳥狂歌合』^{ももちどりきょうかあわせ}（寛政4（1792）年）とともに、歌麿の狂歌絵本三部作ともよばれる本書には、版の一部が異なる数種の刷りがあることが知られています。蔦唐丸の狂歌が入るボストン美術館本が最も早いもので^{*2}、当館本はその次とされています^{*3}。

- *1 浅野秀剛「潮干のつと」解説『歌麿の風流』小学館、2006。『貝盡浦之錦』は大枝流芳著、寛延4（1751）年、伊和惣兵衛ほか。
- *2 小林ふみ子「潮干のつと」解説『別冊太陽 日本のこころ』245、平凡社、2016.12
- *3 前注および浅野秀剛「絵入本の流通と後修本—歌麿の彩色摺絵入狂歌本七種を例に」『国文学 解釈と鑑賞』73、2008.12

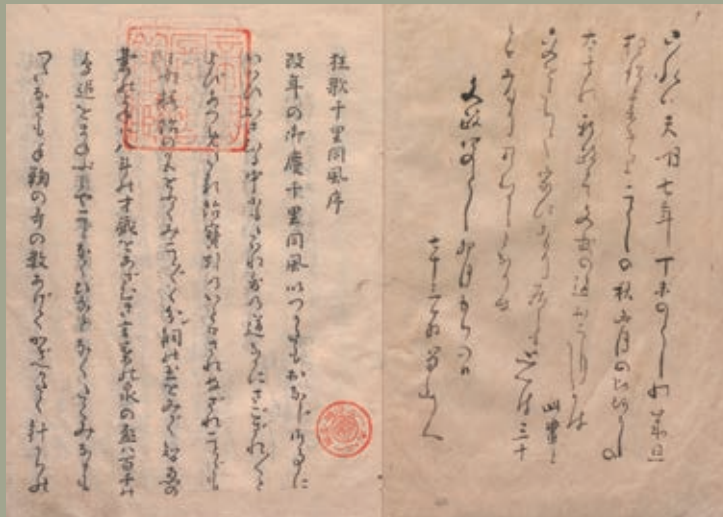


きょうかせんりどうふう
狂歌千里同風

天明 7 (1787) 四方赤良編 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122016>

四方側最後の歳旦狂歌集です。当館本および東京大学国文学研究室本には、太田南畝（四方赤良・蜀山人）が晩年に記した識語があることが知られています*。「何かしの太守」とは松平定信のことで、定信による新政が、南畝と狂歌師たちとの交友にいくばくかの影響を与えたことがわかります。

* 『太田南畝の世界 没後 200 年江戸の知の巨星』たばこと塩の博物館, 2023 に両伝本識語の写真あり。内容はほぼ同じだが、東京大学所蔵本の識語は当館本の約 1 年前の日付・年齢となっており、署名の代わりに落款がある。



見返しの識語「これは天明七年丁未のとしの歳旦狂歌集なり ことしの秋文月の頃何かしの太守の新政にて文武の道おこりしかは此輩と交をたちて家にこもり居しと思へは三十とせあまりのむかしとなりぬ 文政四のとし卯月もちの日 七十三翁蜀山人」

しゅんじょう
春帖

つむりひかる くぼしゅんまん
寛政 5 (1793) 頭光編, 窪俊満等画 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122023>

つむり光・窪俊満を中心とした、伯楽連^{*1}の歳旦狂歌集です。寛政以後、狂歌主体で複数絵師の挿画を含む合筆絵入狂歌本の出版が始まりますが、本書はその最初期のひとつ^{*2}で、挿画は堤等琳・窪俊満・鈴木隣松によります。

*1 狂歌グループのひとつ。

*2 浅野秀剛「寛政期の合筆絵入狂歌本の成立」『秘蔵浮世絵大観』3 (大英博物館 3), 講談社, 1988; 市古夏生『春帖』(解題と翻刻) 神保五彌編『江戸文学研究』新典社, 1993



葛屋重の絵姿

それでは最後に、当館所蔵の黄表紙の中から葛屋重三郎の店や姿を描くものをいくつかお見せして、しめくりに代えましょう。今回ご紹介した作品のほかにも、葛屋刊行の出版物は、下記データベースなどで多数ご覧になれます。

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>

ジャパンサーチ <https://jpsearch.go.jp/>

国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/>

古典籍総合データベース（早稲田大学）<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>



自作黄表紙の巻末で挨拶する葛屋重の姿。葛屋はこの年（寛政9年（1797）5月に没する。『身体開帳略縁起』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892980/1/18>



（上）年始の挨拶がてら、喜三二に青本の執筆を依頼する葛屋。『亀山人家妖』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/8929457/1/3>
（左）葛屋の心の中を写す鏡には、京伝の講釈を草双紙にしようという目論見が映る。『人心鏡写絵』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892549/1/17>

（利用者サービス部人文課 石田暁子）

<参考文献>

市古夏生『『春帖』（解題と翻刻）』『江戸文学研究』新典社，1993 <KG211-E22>

宇田敏彦「天明狂歌成立の背景」『江戸文学研究』新典社，1993 <KG211-E22>

木村八重子・宇田敏彦・小池正胤 校注『草双紙集』（新日本古典文学大系；83）岩波書店，1997 <KH2-E3>

小林ふみ子『狂歌絵本『潮干のつと』』『鳥獣虫魚の文学史—日本古典の自然観』4 魚の巻，三弥井書店，2012 <KG748-L6>

佐藤至子『葛屋重三郎の時代 狂歌・戯作・浮世絵の12人』KADOKAWA，2024 <GK13-R165>

山東京傳全集編集委員会 編『山東京傳全集』第1巻 べりかん社，1992 <KG235-E6>；第3巻 べりかん社，2001 <KG235-E6>；第19巻 べりかん社，2023 <KG235-M4>；第20巻 べりかん社，2020 <KG235-M2>

鈴木俊幸 監修『別冊太陽 日本のこころ』（通号 89）葛屋重三郎の仕事，平凡社，1995.4 <Z23-238>

鈴木俊幸 監修『別冊太陽 日本のこころ』（通号 319）葛屋重三郎—時代を変えた江戸の本屋，平凡社，2024.11 <Z23-238>

棚橋正博『黄表紙総覧』前編（日本書誌学大系；48-1）青裳堂書店，1986 <KG1-118>；中編（日本書誌学大系；48-2）青裳堂書店，1989 <KG1-118>；後編（日本書誌学大系；48-3）青裳堂書店，1989 <KG1-118>

棚橋正博・鈴木勝忠・宇田敏彦 注解『黄表紙・川柳・狂歌』（新編日本古典文学全集；79）小学館，1999 <KH2-E9>

中山右尚『『文武二道万石通』雑考—頼朝・重忠をめぐる』『近世文藝』通号 27・28，1977.5 <Z13-907>

浜田義一郎『狂歌歳旦黄表紙五種』『大妻女子大学文学部紀要』3，1971.3 <Z22-627>

水野稔 校注『黄表紙 洒落本集』（日本古典文学大系；第59）岩波書店，1958 <918-N6852>

水野稔「黄表紙における刊年と異版の問題」『国語と国文学』35(7)，1958.7 <Z13-355>

山下則子 編『在外絵入り本 研究と目録』三弥井書店，2019 <UM11-M7>

※ < > 内は当館請求記号

< p.5 扉画像出典 >

『狂歌東遊』寛政 11 [1799] 浅草菴市人 撰，葛飾北斎 画，葛屋重三郎 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2533319/1/49>

葛飾北斎が描く葛屋の店先。初代没後であるが、店頭には初代が企画した狂歌集の看板が見える。



1 MBRLの外観

世界図書館紀行

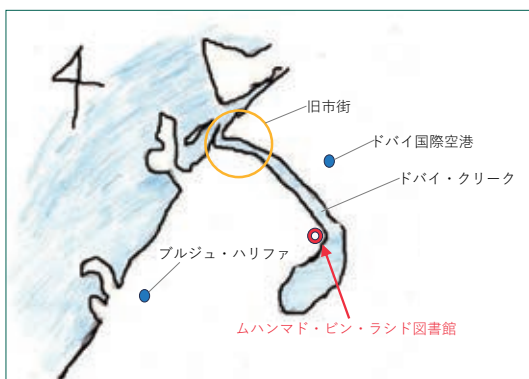
ムハンマド・ビン・ラシド図書館 (UAE)

本田 伸彰

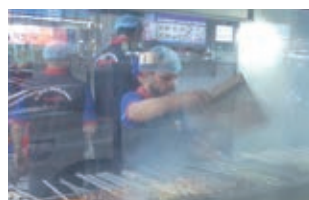
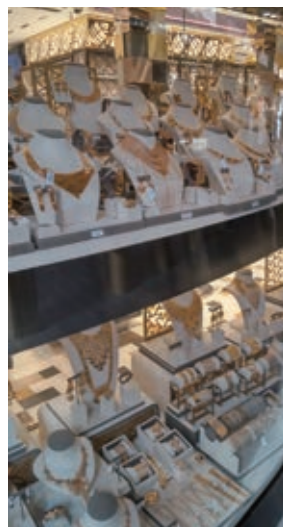
2024年11月15日から17日まで、アラブ首長国連邦 (United Arab Emirates : UAE) のドバイで「第30回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議」(30th Conference of Directors of National Libraries in Asia and Oceania : CDNLAO) と第1回となる「ドバイ国際図書館会議2024」(Dubai International Library Conference 2024 : DILC2024) が開催された。

筆者は、両会議に出席する諏訪康子関西館長に随行し、現地を訪問する機会を得た。

両会議の会場となったのが、2022年にオープンしたムハンマド・ビン・ラシド図書館 (Mohammed Bin Rashid Library : MBRL) である(写真1)。特徴的な内外観を持ち、10の資料室を備える中東地域で最大規模の同図書館について、会議の前後に見たドバイの街の雰囲気も交えて紹介したい。



- 6 自動運転で運行されるドバイメトロ
7 ドバイ・クリークを渡るアブラ
8 ドバイ・クリーク側からの MBRL。
背後に世界一高いビルであるブル
ジュ・ハリファが見える。



- 2 ドバイモールの内部
3 ケバブを提供する食堂。ガラス越しに肉を焼く姿を見ることができる。
4 スパイスを積み上げた商店
5 金製品がディスプレイされた貴金属店

ドバイの街について

ドバイは、UAEを構成する7つの首長国の1つであるドバイ首長国の中心都市である。訪問した11月は、朝晩は幾分過ごしやすものの、昼間は屋外を少し歩いただけでも汗がにじんできて、湿気を含んだ熱い空気が身体にまとわりつくようであった。

ドバイの街はドバイ・クリーク (Dubai Creek) と呼ばれる入江が天然の良港となり、商業地として発展した。湾岸地域の主要産業であった真珠採取業は1920年代以降に衰退したが、ドバイ・クリークの整備により貿易港としての機能を高め、さらに1966年には石油が発見され、開発が進んだ。

現在では、経済の軸足を貿易や観光、金融業に置き、石油に頼らない国づくりが進められている。ドバイ首長国の人口は、1975年末に約18万人であったが、2023年末には約366万人と半世紀の間で20倍以上に増えている^①。

ドバイといえば、世界一の高さ(828メートル)を誇るブルジュ・ハリファ (Burj Khalifa) をはじめとする高層ビルや、ヤシの木形で海を埋め立てた人工島パーム・ジュメイラ (Palm Jumeirah) のリゾートホテルなど、近未来的な都市の壮観や高級感ある施設がメディアなどで取り上げられることも多い。世界最大規模のショッピングモールであるドバイモール (写真2) には、1200を超える店舗や200を超えるレストランがあ

り、年間1億人以上が訪れるとされる。

一方、ドバイの発展の礎となったドバイ・クリーク沿いの旧市街では、活気あふれる庶民的な食堂 (写真3) や昔ながらの街並みが今も残る。香辛料を店頭に積み上げた商店 (写真4) が並ぶスパイス・スークや、金製品を時価で販売する貴金属店 (写真5) が並ぶゴールド・スークなどの市場も多くの観光客をひきつけている。

2009年に開業した都市鉄道のドバイメトロ^② (写真6) は、基本的に乗務員がおらず、自動運転が行われている。ドバイ・クリークでは対照的に、船頭が操舵するアブラと呼ばれる渡し船が兩岸を行き来する (写真7) など、街中で新旧のコントラストを楽しむことができる。なお、ドバイメトロは初乗り運賃が4ディラハム (約180円)。1ディラハムを約45円で換算、以下同じ)、アブラは短いルートの乗船代が1ディラハム (約45円) で、どちらも住民や観光客の貴重な足となっている。

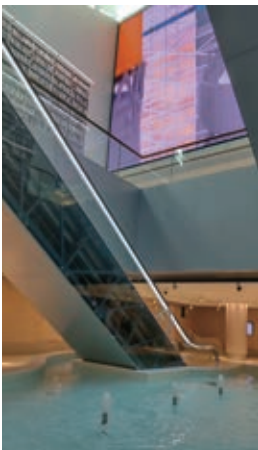
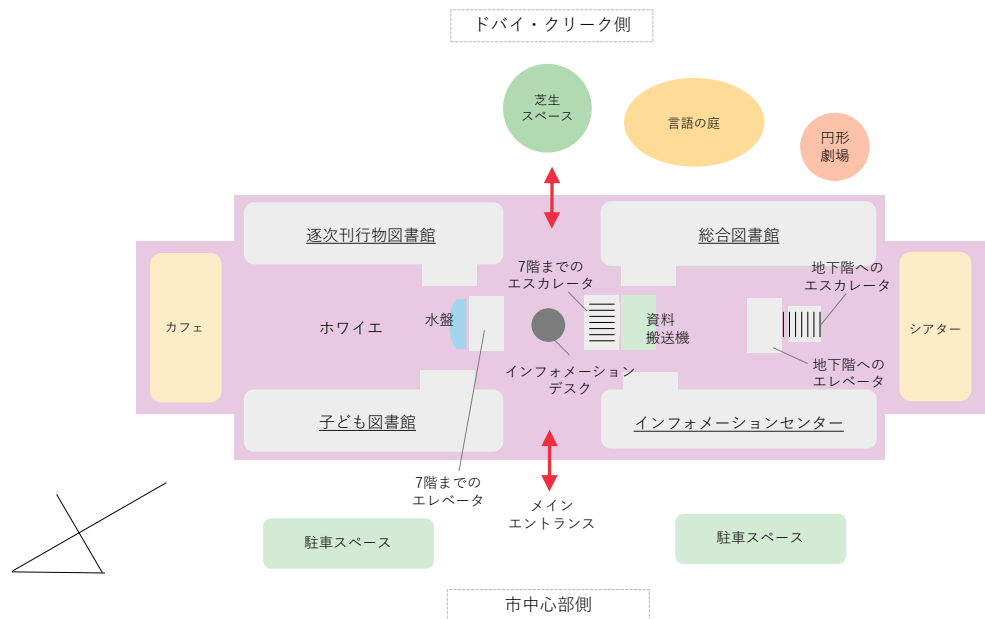
MBRLの概要

MBRLはUAEが国家読書年と定めた2016年に、ドバイの首長でUAEの副大統領兼首相でもあるシェイク・ムハンマド・ビン・ラーシド・アール・マクトウム殿下 (His Highness Sheikh Mohammed bin Rashid Al Maktoum) が建設を指示した。「知識、文化、創造性の灯台になること」をビジョンに掲げ、2022年6月に開館した。

フロアごとの主な施設

フロア	主な施設
7階	展示室
6階	エミレーツ図書館、ビジネス図書館
5階	特別コレクション図書館
4階	会議室
3階	事務スペース
2階	学習室
1階	メディア・アート図書館、地図図書館、ヤングアダルト図書館、カフェ
グラウンドフロア	インフォメーションセンター、総合図書館、逐次刊行物図書館、子ども図書館、シアター、カフェ
地下階	礼拝室、デジタル化作業室、修復センター、駐車場

グラウンドフロアの平面図



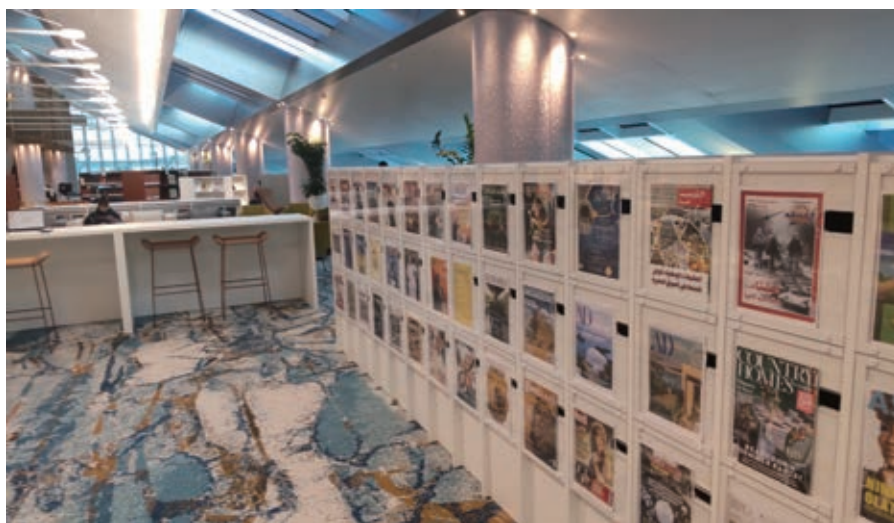
9 水盤がある地下階の様子。
天井からの光が地下階まで
差し込んでいる。

旧市街のあるドバイ中心部の南側に位置し、開発が進むアルジャダフ (Al Jaddaf) 地区に立地する。ドバイメトロの最寄駅からは徒歩10分ほどの距離にあるほか、図書館の敷地はドバイ・クリークにも面しており（前頁写真8）、対岸に渡るアブラの発着場からも徒歩圏内にある。

5万4千平方メートルの敷地に10億ディラハム（約450億円）をかけて建設された建物は、白を基調とした外観が青い空に映える。横から見ると、カモメが羽を広げたようなV字型の大きな構造体が上部に載っているようなデザインで、これはコランを置くための伝統的な木製の台を模したとのことである。

内部は、ムスリムのための礼拝室や資料デジタル化のための作業スペース等がある地下階と、地上はグラウンドフロアに加えて1階から7階で構成されている。市中心部側のメインエントランスから入ったところがグラウンドフロアで、正面にインフォメーション・デスクがある。ホワイエの上部は天井まで吹き抜けとなっており、ガラス張りのエレベータとエスカレータが上階に向かって伸びている。天井も一部がガラス張りで、外光が差し込む館内はとても明るい（写真9）。

インフォメーション・デスクを中心とするホワイエは長方形で、長辺がそれぞれ2つの資料室に面し、短辺にあたる両端にはシアターとカフェがある。ホワイエの壁は書架になっており、その高さは1つ上の1階の天井まで



11 逐次刊行物図書館



12 インフォメーションセンター



10 ホワイエの様子

あるが、書架にある資料は飾りとして並べられ利用することはできない(写真10)。

主な資料室と施設

館内の主だった資料室や施設をグラウンドフロアから順にみていくと、まずグラウンドフロアには4つの資料室がある。

総合図書館(The General Library)は、人文学、社会学、科学など幅広い分野を対象とした資料が並び、筆者が所属する関西館の総合閲覧室に近いイメージである。館内に10ある資料室では一番多い、40万点を超える資料を所蔵している。逐次刊行物図書館(The Periodicals Library)では、新聞や雑誌を閲覧することができる(写真11)。

インフォメーションセンター(The Information Centre)には、辞書や百科事典などの参考図書のほか、点字図書などが並ぶ。室内には、利用者が館内で使用することができるノートPCやタブレット端末の貸出スタンドも設置されている。会議場としても使用され、陪席者も含めて30人超が参加したCDNLAOの会合もインフォメーションセンターで開かれた(写真12)。

5歳から12歳までを対象とした子ども図書館(The Children's Library)もグラウンドフロアにある。室内には滑り台など複数の遊具や、子どもの動きに合わせてスクリーン内の物語が進むアトラクションなど、子どもが身体を動かしながら、本の世界を楽しむことが



14 子ども図書館内の遊具



15 子ども図書館内の接客型ロボットで遊ぶ子ども



13 子ども図書館内の書架

できる資料室になっている（写真13、14）。接客型のロボット（Pepper）もいて、子どもたちが話しかけている様子が見られた（写真15）。なおMBRLでは、5歳未満は利用することができないため、子ども図書館が館内で対象年齢の一番低い資料室となる。

メインエントランスから入り右奥にあるシアター（次頁写真16）には約540人を収容でき、CDNLAOと同時に開催されたDILC2024のメイン会場となった。DILC2024はMENA（中東及び北アフリカ）地域最大の図書館イベントを目指し創設され、世界中から70人を超えるスピーカーが登壇し、2400人以上が参加した大規模なものであった。図書館業務への人工知能（AI）の活用やオープンサイエンスをテーマとしたパネルディスカッションなどがシアターで行われた。シアターの入口上部には大型のスクリーンがあり、スクリーンの前の決まった位置に立つと、その人がスクリーンの中に登場するような仕掛けもあり、会議の参加者にも人気を集めていた（次頁写真17）。

ホワイエを挟んでシアターと正対するカフェは、グラウンドフロアと1階の2つのフロアにまたがり、資料室などからは区切られたエリアとなっている。グラウンドフロアに飲食物を注文できるカウンターがあり（次頁写真18）、1階は貸切りにも対応したスペースで、今回は会議参加者の昼食会場として使用された（次頁写真19）。



17 シアター入口の上部にあるスクリーン。ホワイエにいる人が映し出されている。



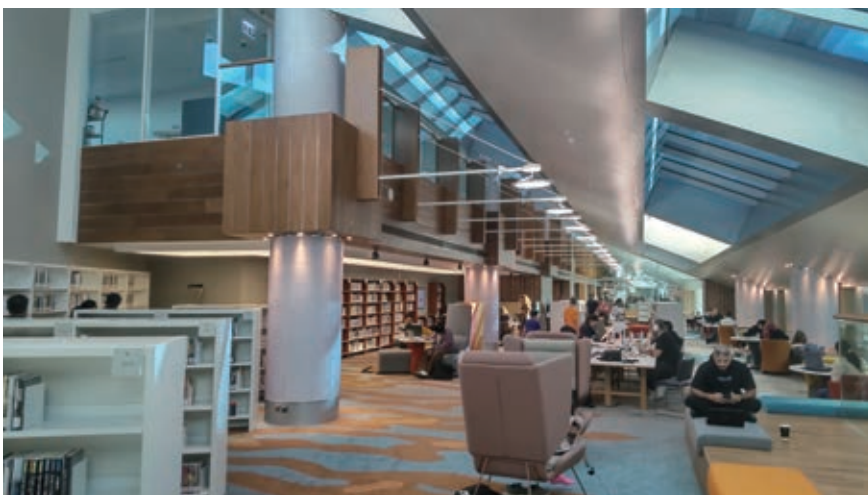
16 シアターの様子



18 グラウンドフロアにあるカフェのカウンター



19 1階のカフェの様子



20 ヤングアダルト図書館

続いて1階にも、3つの資料室が配置されている。12歳から17歳を対象としたヤングアダルト図書館(The Young Adults Library)(写真20)には、グラウンドフロアの子ども図書館内の階段を上がって直接行くこともできる。小説やコミックなども排架され、「NARUTO -ナルト-」や「ハイキュー!!」など日本の人気作品の英訳版なども並んでいた。

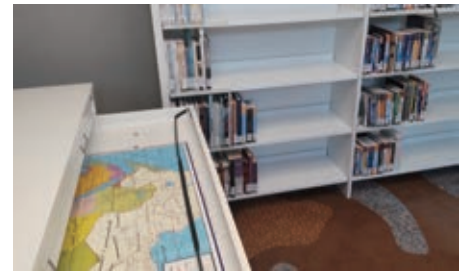
地図図書館(The Maps and Atlases Library)には、1枚ものの地図のほか旅行



24 グループ用の学習室。入口横のパネルで予約状況等が分かるようになっている。



23 メディア・アート図書館



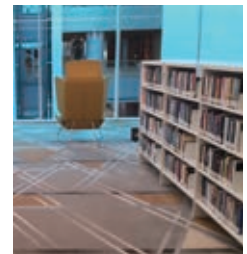
21 地図図書館



22 地図図書館に設置されたワーキングラウンジ



25 6階資料室の様子（左）。吹き抜けに向かって閲覧用のイスが置かれている（右）。



ガイドや地図帖など7000冊以上の図書が所蔵されている（写真21）。室内には、空間が区切られたコンテナのようなワーキングラウンジが設置され、集中して調べものなどができる環境が整っている（写真22）。デザインや音楽等に関する資料を閲覧できるメディア・アート図書館（The Media and Arts Library）は、1階の他の資料室の2倍にあたる広いスペースに、ゆとりを持って書架やイスが配置された贅沢な空間となっている（写真23）。

2階には、グループ用の学習室が6部屋ある。最大2時間まで利用することができ、予約状況などは各部屋の入口横にあるパネルで確認することができる（写真24）。3階は事務スペースで、4階には利用者が予約をして使用することができる会議室がある。また、5階には特別コレクション図書館の名称で貴重本などが収蔵されているが、一般には公開されていない。

6階は、経済関係の資料が揃うビジネス図書館（The Business Library）と、UAEの歴史や文化等に関する資料を集めたエミレーツ図書館（The Emirates Library）で構成されている。資料の内容によるところが大きいと思うが、グラウンドフロアや1階にある資料室と比較して落ち着いた雰囲気となっていた（写真25）。

充実した資料の展示

最上階の7階は、展示のためのフロアとなっ

常設展「図書館の宝物」



28 源氏物語の写本や紫式部のパネル



29 オスマン帝国時代のはさみ



27 「エジプト誌」



26 美術館のような会場

企画展「アラブのジャーナリズム」



31 会場に設置されていたタッチパネル。画面の中の資料を触って動かすことができる。



30 入口

ている。フロアの半分はMBRLが収集した貴重書などを展示する常設の「図書館の宝物」(The Treasure Of The Library)にあてられており、ヨーロッパにおけるイスラムの遺産、雑誌、宗教、地図、イスラムの写本など、テーマごとに展示されている(写真26)。

会場では、ナポレオンのエジプト遠征時に同行した学者らによってまとめられ、19世紀にフランスで出版された「エジプト誌」(Description de l'Égypte)(写真27)や、17世紀に活躍したオランダの地図製作者ヨアン・ブラウの「大アトラス」(Atlas Maior)の初版本なども鑑賞することができる。また文学のコーナーでは、昨年の大河ドラマでも話題となった紫式部のイラストとともに、源氏物語の写本が展示されていた(写真28)。さらに紙の資料のみならず、18世紀ごろの筆箱やはさみなど書物にまつわる道具の展示も印象的であった(写真29)。

フロアのもう一方は企画展に利用され、特別展「アラブのジャーナリズム」(Arab Journalism Exhibition)が開催されていた(写真30、31)。「歴史を通じた旅」(A Journey Through History)をテーマに地元UAEをはじめとするアラビア語圏で発行された新聞や雑誌など500点以上を、女性や芸術、UAEのジャーナリズムなど7つのセクションに分けて展示しており、過去から現代までを文字通り、旅するように鑑賞することができた。



32 屋外の円形劇場



33 芝生のある広場



35 日本語が記された
モニュメント



34 「言語の庭」の様子

建物外のスペース

グラウンドフロアに戻り、メインエントランスと反対側の出入口から建物の外に出るとドバイ・クリークに面した公園のようなスペースがあり、ライブイベントなどにも使用できる円形劇場もある(写真32)。訪問時にはキッチンカーが出店し、芝生の広場に設けられたテントの下で飲食できるようになっていた(写真33)。60本の柱型のモニュメントが立ち並び、現代アートのような「言語の庭」(The Languages Garden)(写真34)は、図書館の名称の由来でもあるドバイ首長のシェイク・ムハンマド・ビン・ラーシド・アール・マクトゥーム殿下の言葉が、日本語も含む171の言語に訳され、モニュメントに記されている(写真35)。

利用者へのサービス

MBRLでは無料で登録できる会員のほかに、本を館外に借り出すことや、オンラインのコンテンツやデータベースをどこでも利用することができる有料の会員制度もある。有料の会員にはいくつかの種類があり、例えば、個人や学生の会員は有効期間が5年で、個人で50ディラハム(約2250円)、学生や政府関係者で25ディラハム(約1125円)の会費と、150ディラハム(約6750円)の保証金を支払うことで、1週間に5冊まで本を借り、1回まで延長できるほか、オンラインのコンテンツも利用することができる。



36 子ども図書館に設置された資料の貸付機（右）と利用者が使用することができるタブレットのスタンド（左）



39 資料室に設置されたスキャナ



38 各階に設置された案内用のタッチスクリーン



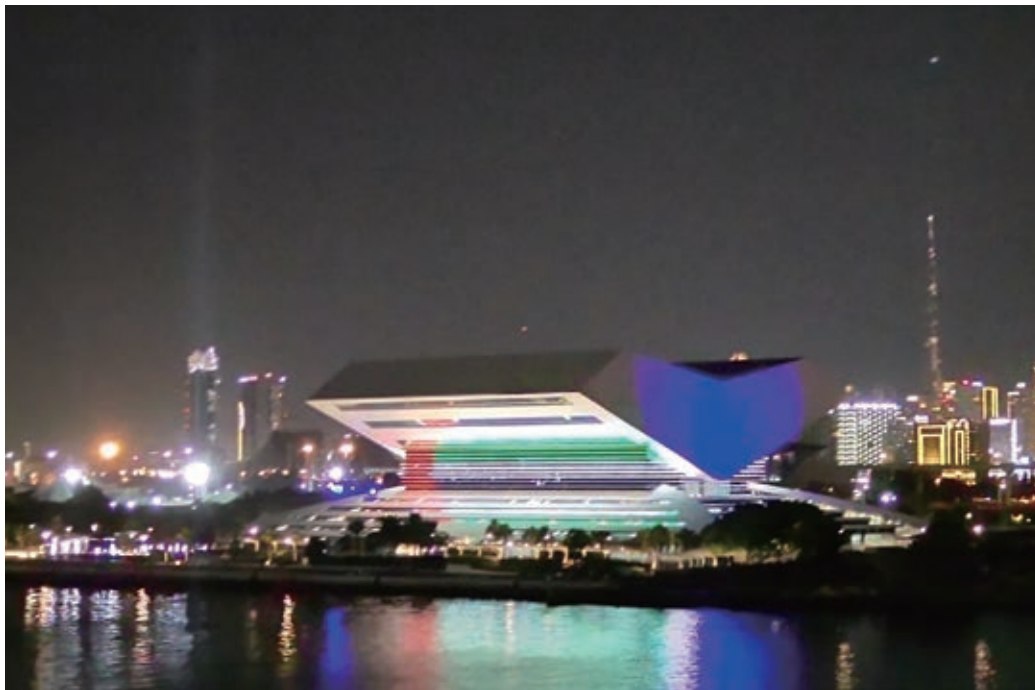
37 置くだけで資料の返却手続きをすることができるスマートシェルフ

デジタル会員は有効期間が1年で、70デリラム（約3150円）の会費でオンラインのコンテンツを利用することができる。保証金は不要だが、本を借り出すことはできない。そのほか、子ども会員やシニア会員、法人会員なども用意されている。

本を借りる際には、カウンターで手続きをするか、利用者自身が操作できる機械（写真36）で手続きをし、返却時にはグラウンドフロアにあるスマートシェルフと呼ばれる棚（写真37）に置くことで手続きを完了することができる。なお、閉架の資料は地下にある自動書庫から、搬送機によってグラウンドフロアにあるインフォメーション・デスクに届けられる。自動書庫は90万冊以上の本を保管することができるが、1時間に最大125冊の本を取り出す能力があるという。

このほか各階には、館内の設備や蔵書に関する情報を提供するタッチスクリーンが設置されている（写真38）。各資料室にはスキャナ（写真39）も備えられており、決められた範囲内でスキャンした内容をUSBに入れて持ち帰るか、もしくはメールで送ることができる。

また、UAEでは障害のある人を「決意ある人」（People of Determination）と呼び、社会への貢献に対して敬意を表しているが、MBRLにおいてもサービスや機能の面で積極的にサポートしており、館内には感覚が過敏である人に落ち着きをもたらすためのセンサー・ポッドと呼ばれる空間なども設けられ



40 UAEの国旗の色をイメージしてライトアップされたMBRL

ムハンマド・ビン・ラシド図書館 (Mohammed Bin Rashid Library)

〔所在地〕 Al Khail Rd, Al Jaddaf, Dubai

〔ウェブサイト〕 <https://www.mbrl.ae/>

〔開館時間〕

月曜日から木曜日、土曜日：午前9時から午後9時

金曜日：午後2時から午後9時

日曜日：休館

〔その他〕 5歳未満の子どもは入館できない。

ている。

おわりに

MBRLの洗練された館内では、利用者が思い思いの場所でそれぞれの時間を過ごしていた。同館のホームページには、優れた資料へのアクセスや質の高いサービス、またアラビアの文化と遺産をすべての人に提供し、知識への情熱を刺激することが同館の使命であると書かれているが、館内の様子を見ると、

開館から3年足らずでこれらの使命を果たしているようにも思える。ここ数十年の間で急速に経済的な発展を遂げたドバイが、今後は文化的、学術的な面においても、世界をリードする都市の1つになることを想像させる訪問となった(写真40)。

〔注〕

- 1 出典：ドバイ統計センター「ドバイ首長国の男女別人口」
https://www.dsc.gov.ae/Report/DSC_SYB_2023_01_01.pdf
- 2 メトロの名称があるが、地下区間よりも高架を走る区間の方が多い。現在は、レッドラインとグリーンラインの2路線が営業しており、今後も新たな路線の建設が計画されている。
- 3 エミレーツ航空の設立など、多くの国家プロジェクトをけん引してきた。愛馬家としても知られ、1996年に創設した競馬のドバイワールドカップは、世界的な競馬の祭典として定着している。

※本記事掲載の写真は全て筆者撮影。



書架に並ぶ光ディスク



LTOテープカートリッジ



デジタル化のその先は？

「国立国会図書館デジタルコレクション（デジタルコレ）」は、デジタル化した当館所蔵の資料等を見られるデータベースです。デジタル化が済んだ紙の資料は、汚損・破損を避けるため利用を停止し書庫に保管されます。では、デジタル化したデータの行方は？ デジコレのサーバに収められているのはもちろん、それとは別に、インターネットにつながらない環境にも保存用のバックアップデータがあります。これまでは光ディスク（DVDやBlu-rayディスク）に格納し、書庫で保存してきました。しかし、約19万枚（！）もの光ディスクの管理は容易ではなく、スペースもとります。そこで近年は、新たなデジタル化データをLTO（Linear Tape-Open）という大容量の磁気テープに格納する方法へ切り替えています。とはいえ、すでにデータを格納した光ディスクの扱いは依然として課題となっていました。

当館では令和3年度に、保存用データが格納された光ディスクからLTOへのデータの移行を開始しました。移行にあたっては、光ディスクの劣化具合を調べ、問題のあるものを優先しています。なお、現在使用しているLTOテープ1巻には、Blu-rayディスク200枚以上のデータを格

納できます。外部委託と職員による作業を並行してデータを移行していますが、書庫に大量に並ぶ光ディスクを見ると、まだまだ先は長いことを実感させられます。

さて、光ディスクやLTOといった電子媒体は、外見からは中身が分かりません。何が格納されているか、どんなフォーマットか、デジコレ上などの資料に対応するのか等々、将来データを利用するために必要な情報も記録し、別途サーバに保存しています。

また、電子媒体にデータを格納した後も、安心はできません。媒体の破損、再生機器が入手不能になる、フォーマットが古くなり読み出せなくなる、といった問題がついて回ります。現時点ではLTOを使用していますが、将来的にもその時代の技術や標準に依じて最適な媒体を選択し、データ移行を繰り返していく必要があります。検証のために画像ファイルを見ていると、広告や雑誌の写真記事など、当時の空気をダイレクトに感じることもしばしばです。未来の世代にデータを確実に受け渡せるよう、これからも業務に取り組みます。

（電子図書館課 研究企画係 道はつづくよ）

本屋に ない本



特別展 ほろよい・ひょうご
酒と人の文化史
兵庫県立歴史博物館編・刊 2018.10
140p ; 30 cm
<請求記号 DL687-M25>

2024年12月に日本の「伝統的造り」がユネスコ無形文化遺産に登録された。日本酒や焼酎、みりんといった日本の酒は、嗜好品や調味料として人々の生活に深く根付いてきた食文化であり、日頃から親しんでいる人も多いだろう。だが、愛飲家であっても、酒造りや酒造地で育まれてきた文化を知っているという人は実は少ないのではないだろうか。

兵庫県立歴史博物館において2018年に開催された特別展「ほろよい・ひょうご―酒と人の文化史―」の図録である本書は、多くの銘酒が生まれた兵庫県の酒造りとその文化を余すことなく伝える資料である。

第一章では道具類や作業工程、作業

を担う蔵人など酒造りの概略を述べ、第二章では伊丹や灘五郷など銘醸地を中心に、兵庫県の酒造りの歴史を解説している。第三章では酒造家が自らの酒を宣伝するために工夫をこらした商業デザインと、酒造家と文人や大名との間に築かれたネットワークの広がりを取り上げ、第四章では錦絵や、文学作品から看取できる酒と人との関係を読み解いている。

本書の注目すべき点は以下の二点であらう。

一点目は「ひょうご」の酒造りという視点である。本書は、「兵庫県」が現在の形となるまでの兵庫県域を「ひょうご」という言葉で表しており、蔵人として出稼ぎにでる人々や、酒造

家同士の交流など「ひょうご」内の動きに着目している。例えば、本書では姫路の酒造家那波家と伊丹の酒造家八尾家の婚姻に関する文献資料が取り上げられており、酒造家が家の継承に尽力する姿を感じ取ることができる。江戸で「下り酒」として人気を博した「ひょうご」の酒は、全国規模の流通に注目が集まるが、「ひょうご」域内での人的交流も注視すべきだと気づかされる。

二点目は豊富な資料紹介である。錦絵等の図像資料だけでなく、多くの文献資料が翻刻付きで紹介されており、酒造りの歴史がひととかれていく。例えば、1783（天明3）年の「運上出銀につき取り計らい願」という文献

資料から、伊丹の酒造家と京都の公家である近衛家との間につながりがあったと分かり、酒造家の人脈の広さに驚かされる。また伊丹の酒造家の女性が残した「万扣よろずひかえ」という文献資料には、冠婚葬祭や年中行事の記録、酒造家の子どもについての記述が多く見られ、酒造家の暮らしを垣間見ることができ、多様な資料から当時の人々をより身近に感じることができるだろう。

阪神・淡路大震災など苦難はあっても、関係者の努力によって、今なお兵庫県内には多くの酒蔵が維持されており、当時の味に思いを馳せることができる。一人の愛飲家としては非常にありがたいことだと切に感じている。

（治田 洋佑）

NDL Topics

利用者アンケートについて

令和7年度利用者アンケートご協力をお願い

国立国会図書館では、提供する各種サービスを改善するために、アンケートを実施しています。

○アンケートページ

国立国会図書館ホームページ▽国立国会図書館について▽利用者アンケート

<https://www.ndl.go.jp/aboutus/enquete/index.html>



利用者サービスアンケート

国立国会図書館のサービスを利用されている方々を対象としたウェブアンケートです。

※実施期間 5月7日（水）～9月30日（火）。

<https://enquete.ndl.go.jp/245695/p/Buil>



各コンテンツ・サービスについてのアンケート

個別のコンテンツやサービスについての各種アンケートも実施しています。

※実施期間 コンテンツ、サービスごとに異なります。実施時にアンケートページ及びコンテンツ、サービスのページ等でお知らせします。

皆様のご意見をお聞かせください。

令和6年度利用者アンケート結果公表のお知らせ

令和6年度は、国立国会図書館のサービスを利用されている方々に対する利用者サービスアンケートに加え、個別のサービス等についてもアンケートを実施しました。

アンケート結果の詳細はホームページで公表しています。ご協力くださった皆様に厚くお礼申し上げます。この結果をふまえて、サービスや業務の改善に活かしてまいります。

○令和6年度利用者アンケート結果のページ

国立国会図書館ホームページ▽国立国会図書館について▽利用者アンケート▽令和6年度利用者アンケート結果

https://www.ndl.go.jp/aboutus/user_surveys/ty2024.html

○問合せ先

総務部企画課評価係
電子メール hyoka@ndl.go.jp



国立国会図書館の令和7年度予算

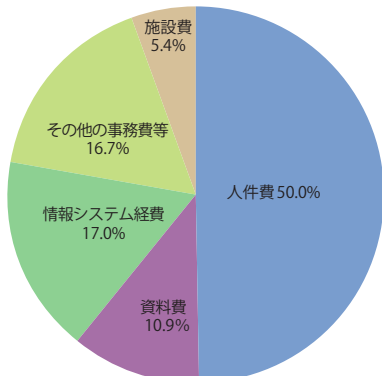
国の令和7年度予算が令和7年3月31日に成立しました。国立国会図書館の令和7年度歳出予算額は、204億2570万円です。その概要は、表のとおりです。

令和7年度歳出予算額

(単位：千円)

(項) 国立国会図書館	19,315,137
人件費	10,214,745
国立国会図書館共通経費	188,265
国会サービス経費	279,183
資料費	2,227,498
うち納入出版物代償金	347,570
情報システム経費	3,466,055
東京本館業務経費	1,746,299
国際子ども図書館業務経費	265,978
関西館業務経費	927,114
(項) 国立国会図書館施設費	1,110,563
東京本館庁舎整備費	692,711
関西館庁舎整備費	417,852
計	20,425,700

予算の費目別構成比(令和7年度)



「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン2.0」を公開

国立国会図書館は、読書に困難を抱える人の多様なニーズに対応するため、「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン」を更新しました。今回の更新では、対象とするアクセシビリティ機能に、発達障害等（発達性ディスレクシアを含む）による読み困難を抱える人たちのニーズが高いフォントの変更、色反転、字間・行間の調整、縦書き・横書きの切替えについてのアクセシビリティ要件を追加しました。

本ガイドラインは、「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」に基づいて設置された関係者協議会に委員を出す団体のうち、電子出版・電子書籍関係団体、障害者団体及び有識者の一部から成る「図書館におけるアクセシブルな電子書籍サービスに関する検討会」（事務局：国立国会図書館）が作成しました。令和5年7月に公開したガイドライン1.0は、音声読み上げ機能を主たる対象としてアクセシビリティ要件を定めました。

ガイドライン2.0における主な更新内容は以下のとおりです。

対象とするアクセシビリティ機能の拡張

アクセシビリティ機能としてガイドライン1.0において中心とした音声読み上げに加えて、フォントの変更、色反転、字間・行間の調整、縦書き・横書きの切替えを追加し、それらに関するアクセシビリティ要件を記載しました。

参考規格にWCAG2.1*及びWCAG2.2を追加

WCAG2.1以降には認知・学習機能障害に対応する達成基準が記載されました。これを受けて、参考規格には、ガイドライン1.0で紐づけたWCAG2.2の一致規格であるJIS X 8341-3:2016に加えて、WCAG2.1、WCAG2.2及びその達成方法を追加しました。

* Web Content Accessibility Guidelines (WCAG) は World Wide Web Consortium がウェブコンテンツのアクセシビリティ実現のために求められる基準を示した仕様であり、ウェブコンテンツをアクセシブルにするための広範囲に及ぶ推奨事項を網羅しています。2025年5月現在の最新版がWCAG2.2です。

WCAG2.1及びWCAG2.2における達成基準の追加に伴うアクセシビリティ要件の追加

WCAG2.1以降で新たに追加された達成基準のうち、電子図書館のアクセシビリティ改善に資すると考えられる要件を、新規のアクセシビリティ要件として又は既存のアクセシビリティ要件の参考規格への追加として記載しました。

詳しくは「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン2.0」のページをご覧ください。

<https://www.ndl.go.jp/jp/support/guideline.html>



新刊案内

レファレンス 892号

我が国の石油備蓄制度の経緯と課題

学校における性別に基づく処遇と米国法タイトル9

— 男女別学、スポーツ競技、性的嫌がらせ及び性

自認をめぐって —

介護保険の給付と負担

デジタル貿易の国際ルール形成の動向—WTO、F

TA、デジタル貿易協定—



A4 105頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

6

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2025.6

NO.770

JUNE
2025

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Shin manga no egakikata: Manga artist OKAMOTO Ippei and the age of democratization
- 05 Please Buy and Read Our Newly Published Books: TSUTAYA Juzaburo's publications in the collection of the National Diet Library
- 22 Travel writing on world libraries
The Mohammed Bin Rashid Library in the UAE
- 33 <Tidbits of information on NDL>
What lies ahead for digitization?
- 34 <Books not commercially available>
Horoyoi · hyogo: Sake to hito no bunkashi: Tokubetsuten
- 35 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和7年6月号 (No.770)

令和7年6月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 田中智子
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 5 . 6

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

冊

人

士